

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 17 日現在

機関番号：32675
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2012～2015
 課題番号：24520866
 研究課題名(和文) スーサ遺跡(イラン)出土楔形文字資料の調査・整理・研究

研究課題名(英文) study on the archives found at Susa, Iran

研究代表者

松島 英子 (MATSUSHIMA, Eiko)

法政大学・キャリアデザイン学研究所・教授

研究者番号：90157305

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：イラン国立博物館テヘラン館には、古代の重要都市であるスーサ遺跡出土の楔形文字資料が多数保存されている。そのうち、シュメール語、アッカド語、エラム語文書の解読、翻訳、歴史・言語的・文化史的解釈と位置づけを行ってきた。2012年から2015年にかけて毎年1回又は2回の頻度でテヘランを訪れ、写真や3D映像などの資料を収集し、帰国後研究を続けてきた。また2014年12月には、その成果報告を兼ねた国際シンポジウムを、海外の一流研究者数名を招き京都大学ユーラシア文化研究所で催した。研究成果出版の用意も着々と進んでいる。科研報告書の形ですでに2冊出されているが、近いうちにISBNを得て公式出版の予定である。

研究成果の概要(英文)：The National Museum of Iran, Tehran, houses an amount of archives, including cuneiform tablets found at Susa, one of the most important city-state in ancient Mesopotamia and Iran. I, as well as my Japanese colleagues have studied Sumerian, Akkadian, and Elamite texts, deciphering, translating, and interpreting from points of history, linguistics and culture studies. Since 2012, we visited Tehran once or twice a year in order to collect pictures and 3D data of archives, then in Japan, have studied with them. In december 2014, we organized an international symposium at the Center of Eurasian Studies in Kyoto University, inviting some specialist from abroad; the main purpose of this symposium was to present a first report of our activities. We have already published two reports with Grant-in-Aide for Scientific Research, and are now preparing a formal report of our scientific activities, trying to get a ISBN number. It will be published in a very near future.

研究分野：古代メソポタミア史、古代イラン・エラム史

キーワード：古代イラン 古代メソポタミア 楔形文書 エラム語 アッカド語 シュメール語 歴史・文化研究 都市国家

1. 研究開始当初の背景

メソポタミアに隣接するイラン南西部には古くからエラム人を主体とした文明が栄え、その中心地スーサは三千年をこえる期間にわたり、この地域のもっとも有力な都として存続した。スーサ遺跡は 20 世紀初めから 1970 年代にかけフランス隊により発掘され、出土遺物の一部はパリのルーブル博物館に移送されたが、テヘランのイラン国立博物館にも所蔵されている。テヘラン所蔵の楔形文書は、現在もなお事実上未整理状態である。その主な理由は、楔形文字研究スタッフの不在にある。テヘランの博物館の碑文部門主任(2011 年当時)アクバルザーデ氏の提言を受けて、国土館大学教授(当時)前川和也を中心に松島を含む日本人研究者がチームを組み、イラン国立博物館との間に研究交流協定(MOU)を締結したうえで、当初は民間財団の研究費、その後、前川を研究代表者とする科研費基盤 A の援助を得て 2011 年度より博物館調査を開始した。松島はこれに研究分担者として参加した。

だが限られた期間内に一定水準の成果を上げるためには、毎年 1 回ないしは 2 回のテヘランにおける調査、さらには欧米の研究者との情報交換が必要であった。そこで松島自身を研究代表者に 2012 年度から 4 カ年にわたる科研費を申請し、効率的に調査と研究材料の収集を行うこととした。

2. 研究の目的

スーサ出土の楔形文字資料は、古代イランと古代メソポタミアの政治的・文化的関係を解明する重要な資料となる。この問題を巡ってメソポタミア側で発見された史料(バビロニア語史料)はこれまでも知られていたが、イラン側の史料は十分調査されていなかった。スーサ遺跡からはエラム語史料ならびにシュメール語やバビロニア語史料が発見されているので、これらを解読・解明することは必須である。また史料自体の傷みが目立つため、鮮明な写真と 3D 画像の収集は欠かせない。これらを集め編集してイラン国立博物館に資料提供し、同時に世界に向けて公開すること、我々自身がレベルの高い研究成果を上げ発信し国際的な議論を喚起することが、本研究の目的であった。

3. 研究の方法

具体的な内容・手順は以下の通りとなった。

(1) スーサ出土楔形文字資料の分類。

発掘年、出土場所の同定が出来ていなかったものについて、過去の発掘報告書や博物館台帳と照らし合わせ分類する。

(2) 文書の写真撮影を行い、必要に応じ手写コピーを作成する。また、連携研究者寺村をはじめ技術・デジタルデータ作成に携わるメンバーの協力を得て、3D スキャニングを行い、データで保存する。

以上(1)(2)の作業は初年度(2012 年度)

から始め、2012、2013 年度に特に集中して行ったが、データの補足など必要に応じ 2015 年度の調査まで続いた。

(3) 科学的データをもとに解読・翻訳・問題点を検討する。これはすでに 2011 年度から始めていた。海外の専門家、とりわけフランス国立科学研究所上級研究員 F. マルブラン・ラバット氏(ルーブル博物館所蔵スーサ文書の総合カタログ執筆者)と頻りに連絡を取り合い、フランス出張のうちに面談し議論を重ねた。その成果の一部は 2012 年秋に科研費の出版物となった(発表図書欄 に記載)。

(4) 研究成果の公開

すでに成果の一部を助成期間の初期に出版したが(発表図書欄)、成果の中間発表を兼ねた国際シンポジウムを海外の研究者を招待して 2014 年 12 月に京都で実施した。この報告論集も松島が分担者となった科研費基盤 A の報告書として公開された(2016 年 3 月)。これら二点の出版物を ISBN 取得のうえ英語版で公開するための準備が、現在進行している。

4. 研究成果

博物館調査によってえられたデータをもとに、着々と成果は上がっている。スーサ文書のうちエラム語王碑文は記述のように出版物になっている。また、博物館側がわれわれの研究に期待して提案・提示してきたマルヤン遺跡(スーサと並ぶエラム王国の都)出土の文書の解読作業が進行し、近い将来出版物にまとめる予定である。

さてエラム語王碑文、および文書類に含まれていたアッカド語(=バビロニア語)碑文を解読・解釈した結果、いくつかの事実が浮上してきた。以下に興味深い事項を列記する。

(1) 王碑文のタイプ

エラム語王碑文はそのほとんどが、王が行った神殿建設を記念するため作られた。碑文の文体は、王名と神殿名、捧げた神または神々の名を記した単純なものから、神殿建設の宗教的目的、捧げた神々への献辞や祈禱文を伴う複合構造になっているものまで、いくつにも分類できる。前述の F. マルブラン・ラバット氏の協力を得て、私なりにおおきく 4 つのタイプに分類し、それぞれのタイプにつきさらに下部分類を行った。そのうえでそれぞれのタイプごとに翻訳を試みた。ただ、文体の分類基準には様々な考え方があるので、英文出版物の形で公表し、世界中の専門家の議論を喚起したいと考え、準備を進めている。文章のタイプ(パターン)は全体で 20 から 30 ほどになる。なお残念ながら、神殿建設の年名など具体的な情報は乏しい。

(2) 言語的特徴

王碑文から得られるエラム語の言語学的・語彙的情報は限られている。しかしそ

のなかに、相当数の借用語（シュメール語、アッカド語からの借用）が含まれ、メソポタミアとの歴史的・文化的繋がりがきわめて強かったことが分かる。書記の字体には比較的稚拙なものから相当に達筆なものまで含まれ、書記の養成が多様な形で行われたことが推察される。バビロニアから到来した書記も含まれていたであろう。同じ碑文が同じブリックにエラム語とアッカド語の2語併記されているものも少なくない。

(3) 宗教史的観点

王碑文には必ず神名が出てくる。一人の場合も複数の場合もある。バビロニア起源の神と同じ名も見られるが、バビロニアと同一の神が意識されていたかどうかは分からない。宗教的習合現象は当然考えられる。しかし、エラム全体の有力神ナピリシャとスーサの守護神インシュシナクが最も有力であったことは明らかである。

(4) エラム社会における女性の地位

エラム王国は一般に古王朝時代・中王朝時代・新王朝時代と時代区分されるが、そのうち我々が扱ったのは古王朝時代と中王朝時代のものである。

古王朝時代の王碑文には、王がしばしば「シルハハの姉妹の息子」のタイトルを使用している。

中王朝時代の王碑文、特に紀元前12世紀に栄えたシュトゥルク王朝時代の碑文には、しばしば王族の女性の名前が言及されている。女性の実名が王碑文のような公的な文書に記載されるのは、古代中近東では珍しい現象である。王妃一人が言及されている場合、王妃とその子供たちの名（男性）が言及されている場合、王妃と王族の男女複数の名が言及されている場合がある。王妃には、ときに「愛する妻」のタイトルが伴い、また王族の女性には、時に「愛する姉妹」「愛する娘」のタイトルが伴う。王妃、または王が特に寵愛する娘が、高い地位と大きな存在感を有していたことが分かる。

シュトゥルク王朝の王はしばしば先王の「ルフ・シャク」という称号を用いている。この「ルフ・シャク」の意味解釈は研究者により分かれるが、でのべた「シルハハの姉妹の息子」との比較から、王家の有力女性（おそらく王の姉妹）を指すと理解することができる。

以上の事柄を総合すると、エラム王の王権の保持と王位継承に、女性が大きな関わりを持った可能性が極めて高い、単純な母系継承ではなかったにせよ、女性の血統が重視されたことは事実である。しかし女性が自ら王位に就いた痕跡はない。

すくなくとも、周囲の古代中近東世界に比べ、社会における女性の地位が高かったことは間違いなからう。それは考古遺物の分析、とりわけ美術品に女性の姿がしばしば現れている事実からも裏付けられる。

松島は2012年夏のテヘランにおける調査

期間中催された招待講演会において、我々の調査の成果を発表した。また上記3. 研究の方法の4)でも述べたように2014年12月には海外の研究者を招待して調査報告を兼ねた国際シンポジウムが催された。さらには、イラン調査とは別途企画された日仏国際研究企画REFEMA（メソポタミアにおける女性の経済的社会的役割）に参加した。それらの機会にエラム世界における家族関係・女性の社会的役割について取り上げ、世界各地からの参加者の注目を得たと思っている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

Eiko Matsushima, Women in Elamite Royal Inscriptions, The role of Women in Work and Society in the Ancient Near East, 査読有, 2016年刊行予定 (2016年1月校了済み, 15頁)

Eiko Matsushima, Des vivants aux morts ou la mutation onthologique dans les mythes mesopotamiens, in A. Caiozzo (ed.) Mythe, rites et emotions: les funerailles au longue de la soie (Myths, Rites and Funerals: Dead along the Silk Road), Colloque international des 8 et 9 Mars 2013, 査読有, 2016年5月刊行予定 (2015年10月校了済み, 10頁)

Eiko Matsushima, A Royal Inscription of Huteldush-Inshushinak from Tall-i Malyan, Ancient Iran, Ancient Text Sources in the National Museum of Iran vol. 1, Iran-Japan Project of Ancient Text, vol.2, 2016, pp.93-99.

松島英子、REFEMAにおける個人研究を振り返る、独立行政法人日本学術振興会国際交流補助金、2 国間交流事業・フランスとの共同研究、研究課題「古代メソポタミアにおける女性の経済的役割」平成23-26年度研究成果報告書、1, 2014年12月, pp. 87-92

Eiko Matsushima, Women who played the role of Interceder, part II, Blog REFEMA, 査読有, vol.13, no.12, 2013, pp.7-14, <http://refema.hypotheses.org/32>

Eiko Matsushima, Women who played the role of Interceder, part I, Blog REFEMA, 査読有, vol.13, no.12, 2013, pp.1-6, <http://refema.hypotheses.org/32>

〔学会発表〕（計8件）

松島英子、「フテルドゥシュ・インシュシナクの1王碑文を巡って」、シュメール

研究会、2015年6月27日、京都大学ユー
ラシア文化研究センター（京都府京都市）

Eiko Matsushima, A Royal Inscription of
Huteldush-Inshushinak from Tall-I
Malyan, Ancient Iran; New Perspectives
from Archaeology and Cuneiform Studies.
First Colloquium of Iran-Japan Project
of Ancient Texts, 2014年12月6日-12月
7日、京都大学ユーラシア文化研究センタ
ー（京都府京都市）

Eiko Matsushima, Women in Elamite Royal
Inscriptions, The role of Women in Work
and Society in the Ancient Near East,
2014年11月5日-11月7日、パリ第10: ナ
ンテール大学（ナンテール、フランス）

Eiko Matsushima, Women in Elamite Royal
Inscriptions; An Introduction, Roles
economiques des femmes en Mesopotamie,
4th workshop (古代メソポタミアにおける
女性の社会的経済的役割, 第4会例会 招
待講演), 2014年5月26日、中央大学文学
部（東京都八王子市）

Eiko Matsushima, hirtu and kallatu as
titles of wife, Roles économiques des
femmes en Mesopotamie, 3rd workshop,
2013年9月4日、Seminar House, (カル
ケラン、フランス)

Eiko Matsushima, Women who played the
role of Interceder, part I, Roles
économiques des femmes en Mesopotamie,
2nd workshop (古代メソポタミアにおける
女性の社会的経済的役割, 3会例会 招待講
演), 2013年5月20日、中央大学文学部
（東京都八王子市）

Eiko Matsushima, Des vivants aux morts
ou la mutation onthologique dans les
mythes mesopotamiens, Mythe, rites et
emotions: les funeraillles au long de la
soie (Myths, Rites and Funerals: Dead
along the Silk Road), Colloque
international des 8 et 9 Mars 2013, 2013
年3月8日-9日、パリ第7: デイドロ大学
（パリ、フランス）

Eiko Matsushima and Hirofumi Teramura,
Brick Inscriptions in the National
Museum of Iran (招待講演、イラン国立博
物館テヘラン館) 2013年8月12、(テヘ
ラン、イラン)

〔図書〕(計1件)

Eiko Matsushima and Hirofumi Teramura,
Brick Inscriptions in the National
Museum of Iran; a catalogue. Ancient Text
Sources in the National Museum of Iran
vol. I, Iran-Japan Project of Ancient
Text. Nakanishi Printing Co. Ltd, Kyoto,
Japan (total 245 pages, Matsushima :
pp.2-220).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松島 英子 (MATSUSHIMA, Eiko)
法政大学・キャリアデザイン学研究所・共
教授
研究者番号: 90157305

(3) 連携研究者

森 若葉 (MORI, Wakaha)
国立館大学・イラク古代文化研究所・共
同研究員
研究者番号: 80419457

寺村 裕史 (TERAMURA, Hirofumi)
国立民族学博物館・文化資源研究センタ
ー・助教
研究者番号・10455230